

上代語彙としての「しぐれ」

井上さやか

一 はじめに

「しぐれ」は、現在では「時雨」と表記される。しかし、この用字は『下学集』（元和三年（一六一七）板）にまで時期がくだらなければ、見出すことができない。「しぐれ」と「時雨」を容易に結びつけることはできず、時代によって表記が変わった際に、言葉の意味も変化した可能性は無視できない。

すでに内田顕徳氏⁽¹⁾によって、「時雨」という表記の成立過程と意味の変遷について詳細に論じられているところである。

他方で、注釈書の類では、古代から現代にいたるまでの「しぐれ」や「時雨」が一括して説明されていることが多い。秋から冬にかけて降る特徴的な雨の意味であるとされ、冬の季語ともなっている。そして、「小雨⁽²⁾”とするものや、「通り雨⁽³⁾・”にわか雨”とするものなどがある⁽³⁾。このような解釈の揺れは、方言や時代の変遷による解釈の相違が混交した結果ではないかと考えられる。したがって、上代における「しぐれ」の意味を知るには、万葉集などの用例に沿って、あらためて意味内容を確認する必要があると思われる。

また、「しぐれ」ということばは、中国文学の語彙・表現と比較

してみても、同一または類似するものがないことが注意される。

日本語は、中国語のための文字である漢字を取り込み、独自に発展を遂げたことばである。その初期にあたる上代において、「しぐれ」が日本独自の語のひとつとして捉えられるのである。

そこで本稿では、中国文学のなかの「雨」に関する語彙・表現と比較しながら、「しぐれ」という和語の成り立ちを探り、上代における「しぐれ」の意味と、それによって表される日本文学の性質について考えてみたい。

なお、本稿では上代における「しぐれ」について、こんにちのいわゆる「時雨」とは区別するために、シグレと表すことにする。

二 シグレの表記

万葉集中には、シグレの語が三十七例みられる。その表記をみると、次のように書かれている。

四具礼	十四例
之具礼	四例
志具礼	二例
思具礼	一例
斯具礼	一例
此具礼	一例
鍾礼	十三例

「四具礼」などの音仮名による表記とともに、「鍾礼」という表記が目立つ。「鍾礼」は、内田氏によって訓字として位置し得た表記であると指摘されている⁴⁾。

他方で、『日本書紀』には、一例だけであるが「時雨」と書いた例がある。

十二月、百官大会。皇太子億計、取天子之璽、置之天皇之坐。再拜從諸臣之位曰、此天子之位、有功者可以処之。著貴蒙迎、皆弟之謀也。以天下讓天皇。々々顧讓以弟、莫敢即位。又奉白髮天皇、先欲伝兄、立皇太子、前後固辞曰、日月出矣、而燭火不息。其於光也、不亦難乎。時雨降矣、而猶浸灌。不亦勞乎。所貴為人弟者、奉兄、謀脱脱難、照徳解粉、而無処也。即有処者、非弟恭之義。弘計不忍処也。兄友弟恭、不易之典。

〔『日本書紀』 顕宗天皇即位前紀〕

弘計王（顕宗天皇）が、皇位継承を辞退し、兄である億計王に皇位を譲ろうとする場面で日や月が出てても灯火を灯すことや「時雨」が降つてもなお水をやるということのように、必要のないことをする例をあげる際に用いられている。ここでいう「時雨」とは、いわゆる「しぐれ」のことではないであろう。

この場合の「時雨」は、時節に応じて降る雨のことであり、中国文学の語彙をそのまま取り入れたものと考えられる。なぜならば、

この「時雨」は、次の例を下敷きにしたとみられるのである。

莊子曰、堯以天下讓許由。曰、日月出矣、而燭火不息、其於光也、不亦難乎。時雨降矣、而猶浸灌、不亦勞乎。

〔『藝文類聚』 卷二十一、人部五、讓〕

一見して『日本書紀』が、この一文を典拠としたことが窺える。また、同じく『藝文類聚』のなかに、次のような用例も見出すことができる。

尸子曰、氏治天下、欲雨則雨、五日為行雨、旬為穀雨、旬五日為時雨、正四時之制、萬物咸利、故謂之神。

〔『藝文類聚』 卷二、天部下、雨〕

神農が天下を治めていたときは、時節にあった雨を降らせ、それが万物にとって益をもたらしたという。そうした雨が「時雨（ジウ）」であった。

この『日本書紀』の例のように、漢籍の語彙がそのまま取り入れられ使用された例は非常に多い。

試みに、上代文献における「雨」に関する語彙を抽出してみると、次のとおりである。

古事記 雨（アメ）、暴雨（ハヤサメ）、大雨（オホキアメ）、

水雨（ヒサメ）、大水雨（オホヒサメ）、阿米（アメ）、

阿佐阿米（アサアメ）

日本書紀 雨（アメ）、微雨（コサメ）、大雨（ヒサメ）、甚雨

(ヒサメ)、風雨(カゼアメ)、霖雨(ナガメ)、霖(ナガメ)、雪雨(ユキアメ)、時雨(ジウ)、淫雨(インウ)、甘雨(カンウ)、陰雨(インウ)など

風土記

雨(アメ)、風雨(カゼアメ)、霖雨(ナガアメ)、立雨(タチサメ)、波夜佐雨(ハヤサメ)

懷風藻

雨(ウ)、行雨(カウウ)

これらを見る限り、シグレということばは、万葉集以外では見出せないといえることができる。⁽⁵⁾

『日本書紀』に多くの熟語が記されているのは、漢文体によって書かれていることによると考えられる。先の「時雨」の例でみたように、中国の熟語をそのまま用いているのであろう。ただし、たとえば「霖」のように雨に関する漢字は、中国文献では多数あるにも関わらず、上代文献ではほとんど取り入れられていない。⁽⁸⁾

同じく漢文体による書であっても、『懷風藻』に例が少ないのは、資料そのものの文字数の少なさと同時に、詩の主題の偏りによるかと思われる。

これらの文献中には、「時雨(ジウ)」のように漢音のまま熟語を取り入れたと思われる例と、「霖雨(ナガアメ・ナガメ)」などというかたちで、漢語による熟語を和訓によって取り込んだ例がみられる。しかし、万葉集におけるシグレは、そのような中国の語彙を踏まえたものとは言い難く、―アメ(―メ)という語の構成も持たな

いので、どちらにも当てはまらないといえることができる。

万葉集における雨に関する語彙についてもみておこう。アメの用例が一二二例あるうち、次のような語彙がみられる。

春雨(ハルサメ)――二〇例

村雨(ムラサメ)――一例

霖・霖雨(ナガアメ)――二例

小雨・霖・霏霖(コサメ)――七例

春之雨(ハルノアメ)――三例

秋之雨(アキノアメ)――一例

これらと比較して、シグレは、漢字の「雨」と、アメという和語が結びついたことで形成されていた複合語彙とは性格を異にしている例であるといえることができる。

三 シグレの雨

次に、万葉集のシグレの意味を考えてみたい。その際に注目しておきたいのは、次にあげる十四例が「シグレの雨」という表現を用いている点である。

1 待時而落鍾礼能雨零収開朝香山之将黄變

(秋雜・市原王8一五五二)

2 鍾礼能雨無間零者三笠山木末 歴色附尔家里

(秋雜・大伴稻公8一五五三)

3 平山乃峯之黄葉取者落鍾礼能雨師無間零良志

(秋雜・泉犬養持男8一五八五)

4 隱口乃始瀬山者色附奴鍾礼乃雨者零尔家良思母

(秋雜・坂上郎女8一五九三)

5 思具礼能雨無間莫零 紅尔丹保敝流山之落卷惜毛

(秋雜・仏前唱歌8一五九四)

6 九月乃鍾礼乃雨丹沾通 春日之山者色付丹来

(秋雜・詠黄葉10二二八〇)

7 四具礼能雨無間之零者真木葉毛争不勝而色付尔家里

(秋雜・詠黄葉10二二九六)

8 灼然四具礼乃雨者零勿国大城山者色付尔家里

(秋雜・詠黄葉10二二九七)

9 君之家乃黄葉早者 落 四具礼乃雨尔所沾良之母

(秋雜・詠黄葉10二二一七)

10 不念尔四具礼乃雨者零有跡天雲霽而月夜清焉

(秋雜・詠月10二二二七)

11 九月 四具礼乃雨之山霧 烟寸吾胸誰乎見者将息 (一云、十月四

具礼乃雨降)

12 十月 鍾礼乃雨丹沾乍哉君之行疑宿可借疑

(問答歌12三二二三)

13 毛母布祢乃波都流对馬能安佐治山志具礼能安米尔毛美多比尔家

里 (遣新羅使人15三六九七)

14 秋豆氣婆 之具礼乃雨零 阿之比奇能 夜麻能許奴礼波 久

礼奈為尔 仁保比知礼止毛 多知波奈乃 成流其実者 比太照

尔 伊夜見我保之久

天平感宝元年(七四九)五月二十三日橋歌(大伴家持18四一一)

万葉集中の用例数の半数近くを占めるこれらの「シグレの雨」という例をみると、もともとシグレは「雨」を意味していなかった可能性が考えられる。

そこで、シグレという語の本来の意味について考えてみたい。

集中には、「四具比相」(16三八二一)という例があり、近い音と

いうことができる。しかし、語尾が異なり、類縁関係にある語であるかは判然としない。そこで注目しておきたいのが、シグラフ・シグラムという語である。時代はくだるが、何らかの関連を持つ語彙ではないかと思われる。

その用例は次のとおりである。

…京みやこよりおつる勢せうともなく、勢田せだよりおつるものともなく、今井が旗を見つけて三百余よき騎まぞはせ集あつまる。木曾大おほきに悦よろこび、「此勢このせいあらばなどか最後さいごのいくさせざるべき。こゝにしぐらうで見ゆるはたが手やらん」…

(『平家物語』巻九)

この『平家物語』にあるシグラウデという語は、終止形について説がわかれているが、一軍の集中した様を指すことばであることに異論はでない。

この語は、次のような語彙との関連が考えられる。

Xigurai, o, ota, シグライ, ウ, ウタ (しぐらひ, しぐらふ, う

た) 物がびっしりと密集する。

Xigurami, nu, oda, シグラミ, ム, ウダ (しぐらみ, しぐら

む, うだ) 同上。

(『日葡辞書』)

『日葡辞書』においても、物が密集する様をシグラフ・シグラムという語で表したとある。

これらのことから、シグレとは、物が密集している様子を指すことばであったかと推測されるのである。

なお、万葉集の中で目立つ用字であった「鍾礼」の「鍾」の字義は、「鍾、聚也。」(『玉篇』)とあるとおり、「集まる」という意味がある。この意味から「鐘礼」の訓字が成立していたのではなかつたかと考えられる。

次に歌の表現をみていくと、例2・3・5・7には、シグレが「絶え間なく降る」という表現がされている。シグレが「にわか雨」や「通り雨」として認識されていたのであつたとしたら、こうした表現は生まれてこないであろう。

また、村田正博氏が、次の歌を含む長田王の作歌について述べた際にシグレの描写について触れている。

15 浦佐夫流うらさぶる情こころ佐麻祢之久堅乃天之四具礼能流なぐれあふみれば相見者

(182)

従来、この歌が詠まれた四月になぜ秋や冬のものであるシグレが詠まれたのが問題とされている。村田氏は、ほかのシグレの歌をあげて、すでにシグレと黄葉との結びつきが強かったことをいい、そこからの連想によって季節違いの歌群にあると解いている。

しかし、「天のシグレ」が「流れあう」という描写をみると、ほかのシグレの例と区別して捉える方がよいように思われる。たとえば、雲などがわだかまっている様子を表現したと考えてこそ、うらさぶる心さまねし」という鬱屈した心境とシグレとを重ね合わせて表現する意図が明確になるといえることができるであろう。

この歌は題詞に和銅五年（七一二）とあり、年代がわかるシグレの歌のうちで、もつとも古い例である。そこには、未だシグレが季節の“雨”を指すという感覚や黄葉との強い結びつきはみられないというべきであると考ええる。

また、先の例10をみると、思いがけず“シグレの雨”が降ったが、また晴れて冴え冴えとした月夜になったことが詠まれている。この場合の“シグレの雨”とは、一時に集中して降る、にわか雨のようなものかと考えられる。

これらを合わせて考えたとき、シグレとは本来なにかが密集した様子を表すことばであり、“シグレの雨”とは、狭い範囲や一時に集中して降る雨を意味していたと理解することができるのではないだろうか。

こうした語彙のあり方は、たとえば「夕立」にも当てはまるように思われる。現代で「夕立」といえば夏の季語であり、夏の夕方に降るにわか雨をいう。しかし、万葉集においては次のような「暮立之雨（ユフダチノアメ）」として例を見出すことができる。

暮立之あめふちの雨落毎あめふるごと（一云、打零者）うちふれば 春日野之かすがのの尾花之上乃おはなの上への
白露所念しらつゆおもほゆ

（秋雑歌10二一六九）

暮立之あめふちの雨打零者あめうちふれば 春日野之かすがのの草花之末乃くさばなのうれの 白露於母保遊しらつゆおもほゆ

（16三八一九）

ここに詠まれた「暮立之雨（ユフダチノアメ）」とは、秋の夕暮れに降る雨という意味で用いられている。「夕立」に対して「朝立」（9一七八五、17四〇〇八）ということばがあるが、「朝立」では“雨”と続く例はない。「立」は、ともに朝（夕）になったということの意味する。そこに“雨”と続けることによってはじめて雨を表現することができるのであつて、ここではまだ、「夕立」そのものが特定の雨を意味しているわけではないといえるであろう。シグレの場合も、“シグレの雨”と詠むことを経て、狭い範囲に集中して降る雨を意味するようになった可能性は高い。

ただし、“シグレの雨”と詠まれている十四例のうち、例1〜5・13・14は、いずれも天平期の歌であり、時期的に大きな差はない。そこで、単にシグレとだけある、ほかの用例についてもみてみたい。

万葉集中のシグレという語については、吉田崇たかし氏が季節歌の表現としての特性を中心に述べられている。“色付く”や“黄葉”といったことばとの組み合わせが非常に多いことが指摘されている。これが秋の表現として用いられるのであり、それを“散らす”こともまたシグレの特徴で、こちらは冬に分類されるという。

前掲の村田論文では、シグレの歌は大きく言つて、「黄葉の色を深めたり散らしたりするものとしてしぐれをうたう方法」と「しぐれにつけて配偶者と離れてあるわびしさをうたう方法」の二つの方

法を持つていたと指摘されている。前者が季節歌、後者が羈旅歌であるという。

しかし、「シグレの雨」と詠む例は、これらのいずれにも含まれている。そこで、ここでは、シグレの後に続くことばに着目しながら分類し、改めてその意味を考えてみたい。

もつとも多く見出されるのが、次にあげる「降る」と詠まれた例である。

- 16 春日野^{かすがの}爾^に鍾^{しく}礼^{ふる}零^み所^み見^ゆ明^あ日^す從^{より}者^は黄^み葉^ち頭^か刺^さ牟^む高^た圓^か乃^ま山^の
(秋雑・藤原八束 8 一五七二)
- 17 男神^{ひこかみ}尔^{にくも}雲^{たの}立^た登^{のり}斯^し具^ぐ礼^れ零^{ふり}沾^{ぬれ}通^と友^{とも}吾^{われ}将^{かへ}反^ら哉^{めや}
(高橋虫麻呂歌集中 9 一七六〇)
- 18 竿^さ志^し鹿^か之^の心^{こころ}相^あ念^ひ秋^{あき}芽^は子^こ之^の鍾^{しく}礼^{ふる}零^み丹^に落^ち僧^{しん}惜^し惜^も毛^も
(秋雑・詠花・人麻呂歌集歌 10 二〇九四)
- 19 朝^{あさ}露^{つゆ}尔^に染^に始^は始^は秋^{あき}山^{やま}尔^に鍾^{しく}礼^れ莫^な零^り在^あ渡^わ金^{かね}
(秋雑・詠黄葉・人麻呂歌集歌 10 二二七九)
- 20 大^{おほ}坂^{さか}乎^か吾^{わが}越^こ来^え者^ら二^{ふた}上^{たが}尔^が黄^も葉^ち流^{なが}志^し具^ぐ礼^れ零^み乍^つ
(秋雑・詠黄葉 10 二一八五)
- 21 吾^{わが}屋^や戸^ど之^の浅^あ茅^ち色^{いろ}付^{づく}吉^よ魚^な張^{はり}之^の夏^{なつ}身^み之^の上^{うへ}尔^の四^し具^ぐ礼^れ零^み疑^ぎ
(秋雑・詠黄葉 10 二二〇七)
- 22 左^さ夜^よ深^{ふか}而^{して}四^し具^ぐ礼^れ勿^な零^り秋^{あき}芽^は子^こ之^の本^{もと}葉^は之^の黄^も葉^ち落^ち卷^ま惜^し惜^も裳^も

23 一^{ひと}日^ひ千^ち重^へ敷^{しく}布^{くに}我^あ恋^が我^こ恋^{ふる}妹^{いも}当^が妹^あ当^{たり}妹^に当^あ暮^が零^は礼^れ見^み
(秋雑・詠黄葉 10 二二一五)

24 秋^{あき}田^た荊^か客^か乃^の廬^い入^い尔^に四^し具^ぐ礼^れ零^み我^わ袖^{そで}沾^ぬ干^は人^{ひと}無^な二^に
(秋雑・詠雨 10 二二三三)

25 玉^{たま}手^た次^だ不^た懸^か時^{とき}無^な吾^{わが}恋^こ此^こ具^ぐ礼^れ志^し零^れ者^ら沾^ぬ乍^つ毛^も将^か行^ゆ
(秋雑・詠雨 10 二二三六)

26 黄^も葉^ち乎^は令^ら落^ち四^し具^ぐ礼^れ能^の零^み苗^な尔^に夜^よ副^へ衣^そ寒^む一^{ひと}之^の宿^{しゆく}者^ら
(秋雑・詠雨 10 二二三七)

27 四^し具^ぐ礼^れ零^み暁^あ月^{つき}夜^よ紐^{ひも}不^た解^か恋^こ君^{きみ}跡^{あと}居^い益^{えき}物^{もの}
(秋相・問答 10 二三〇六)

28 霹^{かむ}靂^{とけ}之^の日^ひ香^か天^{てん}之^の九^な月^{がつ}乃^の鍾^{しく}礼^れ乃^の落^お者^ら鴈^{かり}音^が文^の未^{いま}来^だ
(雑歌 13 三二二二)

29 不^た足^{たり}五^{いつ}十^{じゅう}槐^か枝^{えだ}乃^の水^{みづ}枝^{えだ}指^さ秋^{あき}赤^{あか}葉^{もみぢ}……
(雑歌 13 三二二二)

天^{あま}平^{ひら}勝^{かつ}宝^{たから}二^に年^{ねん} 九^く月^{げつ}三^{さん}日^{にち}宴^{えん} 久^く米^{こめ}廣^{ひろ}繩^{なは} 19 四^し二^に二^に一^一

これらは、シグレが特定の雨を表していた例とみられる。例 16・18・27 は秋の歌と位置づけられ分類されており、例 28 も「九月」や「秋」とともに詠まれ、例 29 は秋九月に詠まれている。これらのことから、いずれの例にも秋に降る雨という認識を窺うこ

とができるであろう。

ことに、例23にある「妹があたりに」降っているのが見えるとは、先程みてきたような、局地的に降る雨としてのシグレをよんでいるかと考えられる。「しくしく」とシグレの音の連なりを意識して、観念的によまれた例と考えることもできるが、「シグレ降る見ゆ」と表現した背景には、シグレが局地的な現象として認識されている必要があったであろうと思われる。しかし、このほかの例においては、秋との結びつきはあるものの、具体的にどのような雨であったかまではわからない。

次に、「」に「と続く例をあげておく。

30 おほきのみみかさのやまのみちばはけふのしくれにちりかすきなむ
皇之御笠乃山能秋黄葉今日之鍾礼尔散香過奈牟

(秋雑・大伴家持8一五五四)

31 もみちばをちらすしくれにぬれてきてきみがもみちをかざしつるかな
黄葉乎令落鍾礼尔所沾而来而君之黄葉乎插頭鶴鴨

(秋雑・久米女王8一五八三)

32 かみなづきしくれにあへるもみちばのふかばちりなむせのまじまじ
十月鍾礼尔相有黄葉乃吹者将落風之随

(秋雑・大伴池主8一五九〇)

33 ゆふさればかりのこえゆくたつたやましぐれにきはひろづきにけり
夕去者鴈之越往龍田山四具礼尔競色付丹家里

(秋雑・詠黄葉10二二一四)

これらは「」に散る「」に濡れる「」にあふ「」に競ぶ「」と、それぞれであるが、いずれもシグレという雨によっておこる現象が詠まれているということが出来る。すべて秋に分類されており、

シグレが特定の雨として認識された上での表現であると思われる、作歌年代もおよそ天平後期かと推察される。

また、「」の時「などの例もみられる。

34 ほとときす 鳴五月者 菖蒲 花橋乎 玉尔貫(二云、貫交)
：霍公鳥 鳴五月者 菖蒲 花橋乎 玉尔貫(二云、貫交)

かづらにせむと 九月能 四具礼能時者 黄葉乎 折挿頭跡：
藤尔将為登 九月能 四具礼能時者 黄葉乎 折挿頭跡：

(挽歌・山前王3四二二三)

35 はるされば 殖槻於之 遠人 待之下道湯 登之而 国見所
：春避者 殖槻於之 遠人 待之下道湯 登之而 国見所

遊 九月之 四具礼乃秋者 大殿之 砌志美弥尔 露負而
遊 九月之 四具礼乃秋者 大殿之 砌志美弥尔 露負而

なびけるはぎを 珠手次 懸而所徳：
靡芽子乎 珠手次 懸而所徳：

36 かみなづき しくれのつねかわがせこがやせとのもみちばちりぬべくみゆ
十月之具礼能常可吾世古河屋戸乃黄葉 可落所見

天平勝宝三年(七五)十月二十二日宴(大伴家持19四二五九)

例34・35では、「」の時「」の秋」と表現され、シグレが時節を表す語とされているが、「雨」を意味するのかが判然としない。

例35は作歌年次未詳であるが、例34は山前王の没年が七二三年なので、これ以前の作歌であるということが出来る。「ほととぎす鳴く五月」と対応していることから、少なくとも秋との結びつきは窺える。

このほかに、次のような例もある。

37 うぐひすの 来鳴春部者 巖者 山下耀 锦成 花咲乎呼里
：鶯乃 来鳴春部者 巖者 山下耀 锦成 花咲乎呼里

さをしかの 妻呼秋者 天霧合 之具礼乎疾 狭丹頼歴
左仕鹿乃 妻呼秋者 天霧合 之具礼乎疾 狭丹頼歴

黄葉散作：
(田辺福麻呂6一〇五三)

この歌は、久邇新京を詠んだ歌で、久邇京遷都が行われた天平十三年（七四一）の作と考えられる。「天霧らふシグレ」が激しいので、葉が赤く色づいて散ると詠まれている。例15にみられた「天のシグレ」にも通じる表現で、紅（黄）葉との関連づけ方は、先に見た「降る」と詠まれる例と同様である。

ただし、これらには「シグレの雨」と詠む場合にみられた「間なく降る」という表現は一切みられない。

これらのことから、例23や例34のような歌が、例15に続く作歌とみられ、「シグレの雨」という表現がなされながら、シグレだけでも秋の雨を意味する語として定着していったと考えられる。

内田氏は、前掲論文において「鍾札」の表記の定着を述べる際に、「霽霖」「小雨」とあってもよいところそうならなかったのは、既に「鍾札」が定着していたからだろう。」とし、後世に「時雨」と表記されるようになったことから、「鍾、当也」とあり、時にあたって降る雨を意味すると考えられ」とした。時にあたって降る雨とは、先にあげた中国文学での時節に応じて降る雨という意味の「時雨」に通じるからである。そうした意味があったからこそ、後に「時雨」という表記が定着したとみるのである。

しかし、集中の「小雨」「霽」「霽霖」(ともに訓はコサメ)の例が表す内容は、シグレとは明らかに区別される。その例は次のとおりである。

【小雨】

烏玉 黒髪山 山草 小雨零敷益々所思 (11二四五六)

大野 小雨被敷 木本 時依来 我念人 (11二四五七)

左佐浪之波越安暨仁落小雨間文置而吾不念国 (12三〇四六)

【霽】

伊夜彦於能礼神佐備青雲乃田名引日須良 霽曾保零 (一云安奈尔可武佐備) (16三八八三)

【霽霖】

玉梓之 道来人乃 泣涙 霽霖尔落者 白妙之 衣泥漬而 立留 吾尔語久 (2二二〇)

吾妹子之赤裳裙之将染泥今日之霽霖尔吾共所沾名 (7一〇九〇)

彼方之赤土少屋尔霽霖零床共所沾於身副我妹 (11二六八三)

これらの表現には、シグレの用例に指摘されてきたような「黄葉」や「散る」といった表現との関わりはみられない。また、旅愁も表されてはいない。つまり、シグレとは明らかに異なっている。別語彙であったので文字も書き分けられたとみるのが穏当である。

あろう。

シグレと「こさめ」の混同は、すでに『倭名抄』の記述にみるこ
とができる。

霰 兼名苑曰細雨一名霰小雨也黍木二音「和名古左女」

霰雨 孫蟲曰霰雨小雨也音與終同漢鈔云「之久禮」

〔倭名抄〕卷一、天地部雲雨類

「霰霰」が「小雨」を意味することは、万葉集における用例でも
窺うことができるが、和名をシグレとされた「霰雨」を「小雨」と
注したことから、類似した現象と解されていたとみられる。

これは、『説文解字』に「霰、霰霰小雨也」とあり、『爾雅』釋天
にも「雨霓為霄雪、暴雨謂之凍、小雨謂之霰、久雨謂之淫、淫謂
之霖、濟謂之霽」とあること、加えて、『正字通』に「霰、本作
霰」とあって、『説文解字』にこの字が「霰、小雨也」〔段注：月令
無此文、惟季春行秋令、淫雨蚤降、注云、今月令曰眾雨、漢人眾讀
平声、即許所挾之霰雨也〕とあることなどに拠っていると考えら
れる。

しかしまた、『新撰字鏡』には次のようにもある。

霰 「亡谷反上字（霰）同志久礼又三曾礼」

雹 「雹波角反霰也志久礼又阿良礼」〔『新撰字鏡』卷一、雨部〕

シグレは「霰」でもあり「雹」でもあって、それらはミゾレやア
ラレともよまれていたらしいことがわかる。

これらのことからいって、平安時代においてシグレが「小雨」と
だけ解されていたとはいえず、冬に降る冷たい雨もしくは氷の粒を
含む現象をもいつていたようである。

いずれにしても、平安期の辞書などにみえるシグレは、すでに上
代におけるシグレとは異なる意味に変質していたと考えられる。

上代におけるシグレという語彙は、何かが集まっている様子を表
す本来的な意味から、「シグレの雨」という表現を経て、秋から初
冬の雨を表すことばとして定着したと考えられる。そして、万葉集
の用例を見る限り、「小雨」の意味は見出し難く、場所や時が集中
して降る雨という意味で、秋の気象現象かとみられる例も許容しつ
つ用いられていたと思われる。

四 中国文学の「雨」との対照比較

前項の内容を踏まえた上で、中国文学との対象比較をしておきた
い。多くの語彙が中国文学の影響下に成立していった中で、なぜシ
グレという特異な語が生まれ、なぜ和歌に詠まれる必要があったの
かということは、中国文学における「雨」に関する表現と比較する
ことで、より鮮明に浮かび上がってくると考えるためである。

まず、六朝・隋・唐時代の文学にみえる「雨」の例をみておくと、
次のとおりである。

文選 雨、飛雨、密雨、霖雨、霖、霰霰、春雨など

玉台新詠 雨、陰雨、煙雨、輕雨、(雨絶(雲)) など
藝文類聚 雨、喜雨、苦雨、霖雨、密雨、飛雨、細雨、行雨、

積雨など

日本文学に取り入れられていた熟語を含め多様な「雨」が描かれている。詩経においても雨、霖霖、靈雨、甘雨、陰雨、風雨などがみられ、楚辞においても雨、靈雨、凍雨などがみられることから、これは六朝以降の特徴ではなく、中国文学における「雨」を含む熟語の豊富さを物語っているといえる。

万葉集が特に強い影響を受けたと考えられる『文選』にみえる秋・冬の雨の例をみると、秋の長雨などの災害としての雨が主である。次にその一例をあげておく。

初秋涼氣發，庭樹微銷落，凝霜依玉除，清風飄飛閣，朝雲不歸山，霖雨成川澤，黍稷委疇隴，農夫安所獲，在貴多忘賤，為恩誰能博，狐白足禦冬，焉念無衣客，思慕延陵子，寶劍非所惜，子其寧爾心，親交義不薄。

(第二十四卷、贈答二、曹子建「贈丁儀」)

前半に秋の訪れを描写してはいるが、「雨」としては、川や沼ができるほど降り続くあり様を描き、そうした「霖雨」を嘆いているのである。

シグレのような美的な「雨」が表現された例を探すと、次の二例しかみられない。

大火流坤維，白日馳西陸，浮陽映翠林，迴痰扇綠竹，飛雨灑朝蘭，輕露棲叢菊，龍蟄暄氣凝，天高萬物肅，弱條不重結，芳蕤豈再馥，人生瀛海內，忽如鳥過目，川上之歎逝，前脩以自勗。

(第二十九卷、雜詩上、張景陽「雜詩十首」第二首)

金風扇素節，丹霞啓陰期，騰雲似涌煙，密雨如散絲，寒花發黃采，秋草含綠滋，閑居玩萬物，離劾戀所思，案無蕭氏牘，庭無貢公綦，高尚遺王侯，道積自成基，至人不嬰物，餘風足染時。

(第二十九卷、雜詩上、張景陽「雜詩十首」第三首)

「飛雨」や「密雨」とは、非常に細やかで柔らかい雨をイメージさせ、美しい「雨」の例とすることができ。しかし、これら以外で描かれたこの時期の雨は、厄介な長雨として文学に登場するに過ぎない。これらはいくまでも例外的な描写であるということができ、二首の作者である張景陽の特質と捉えるべきかと思われる。

また、『玉台新詠』にみえる秋・冬の雨を美的に表現した例には、次のようなものがある。

蚩飛綺窓外，妾思霍將軍，鏡前量獸錦，簷下織華紋，墜露如輕雨，長河似薄雲，秋還百種事，衣成未暇熏。

(卷八、劉邈「雜詩四首」其三 秋閨)

これも「輕雨」とあって細かな優しく降る雨を意味するが、霍將軍への思いから流す涙をたとえて表現しているのであって、天候には関わらないといえる。

『藝文類聚』にみえる秋・冬の雨の例も、次に一例を表すとおり、ほとんどが鬱屈をもたらず、災害的な長雨である。

苦雨滋玄冬，引日彌且長。丹墀自穢殪，深樹猶沾裳。客行易感悴，我心摧已傷。登臺望江沔，陽侯沛洋洋。（魏阮瑀詩）

なかで、わずかに次の二例が、美しいイメージを持つ秋の雨として表現されているとすることができる。

清風送涼氣，薄暮蕩炎氛。虹照漣漪水，電出嵯峨雲。落暉散長足，細雨織斜文。（梁虞蹇擬雨詩）

靈霖興乎爽節，膚寸起於曾岑。乃娛情而脫體，猶冬陽與夏陰。塞南帷以寓目，敞北戶而披衿。商律戒於茲辰，涼雨感而已作。

甘泉集而溟溟，油雲興而漠漠。溫飈革於早暮，炎涼改於今昨。乍斜檐而上階，或從風而灑幕。周小庭而密下，泫高枝而疎落。

淥池泛澹，員波修爍。低昂弱篠，葳蕤叢薄。（梁張纘愁雨賦）

しかし、これらも、夏の熱を冷まし秋の訪れを告げはしているが、シグレに相当するような表現のあり方を見出すことはできないといえるであろう。

そのほかで秋・冬の雨を詠んだ例には、次のようなものがある。天道幽且遠，鬼神茫昧然。結髮念善事，漆俛六九年。弱冠逢世

阻，始室喪其偏。炎火屢焚如，螟蟻恣中田。風雨縱橫至，收斂不盈廛。夏日長抱飢，寒夜無被眠。造夕思鷄鳴，及晨願鳥遷。

（陶淵明「怨詩楚調示龐主簿鄧治中」）

陶淵明の詩は、万葉集の自然観や叙景表現に影響を与えたといわれる。しかし、「雨」に関しては、影響関係を見出すことができないといつてよいであろう。

中国文学に倣って作られた『懐風藻』でも、同様の傾向が見て取れる。「雨」が詠まれているのは次の二例だけである。

五言 詠美人 一首 五言 美人を詠む 一首

巫山行雨下 巫山行雨下り、

洛浦廻雪霏 洛浦廻雪霏ぶ。

月泛眉間魄 月は泛かぶ眉間の魄、

雲開髻上暉 雲は開く髻上の暉。

腰逐楚王細 腰は楚王を逐ひて細く、

體隨漢帝飛 體は漢帝に隨ひて飛ぶ。

誰知交甫珮 誰か知らむ交甫が珮、

留客令忘歸 客を留めて歸を忘れしむることを。

（懐風藻三四・荆助仁）

五言 從駕應詔 一首 五言 駕に從ふ應詔 一首

帝堯叶仁智 帝堯仁智に叶ひ、

仙蹕玩山川 仙蹕山川を玩でたまふ。

疊嶺杳不極 疊嶺杳くして極らず、

驚波斷復連 驚波斷えて復連く。

雨晴雲卷羅 雨晴れて雲は羅を卷き、

霧盡峰舒蓮

霧盡きて峰は蓮を舒く。

舞庭落夏槿

庭に舞ひて夏槿を落し、

歌林驚秋蟬

林に歌ひて秋蟬を驚かす。

仙槎泛榮光

仙槎榮光を泛かべ、

鳳笙帶祥煙

鳳笙祥煙を帶ぶ。

豈獨瑤池上

豈に獨り瑤池の上のみならめや、

方唱白雲天

方に唱はむ白雲の天。

(懷風藻三二六・伊與部馬養)

いずれも美的な「雨」といえるが、三四の「巫山行雨下」は、『文選』の「高唐賦」を踏まえた美人の形容である。しかも仙境の描写であって、人界の「雨」とは区別されている。次の三六についても、『論語』の「智者樂水、仁者樂山」や西王母の瑤池の故事を踏まえた神仙的な遊覧の描写のなかの「雨」の例である。

先の中国文学の例を見ても、わずかにみられた美的な「雨」の描写は、仙人の食物である菊など、神仙的な表現のなかに見出されたということができるのである。

ここでも、『日本書紀』の「時雨」のように、中国文学の語彙をそのまま受け継ぐ形で、「雨」が詠まれているといつてよい。『懷風藻』にせよ『日本書紀』にせよ、漢文体によって描かれる場合は、「雨」の描写も漢文学の影響下にあるということが出来る。

ただ、「しぐれ」は、厳密に言えば京都や奈良といった盆地でし

かみられない現象を指すという指摘もある⁽¹⁾。実際に、地形や地表近くの風系について思いをめぐらせると、現在勤務している明日香村周辺の、香具山以南、甘樫の丘以東の山々に囲まれた地域では、隣接する地域に比べてやや体感気温が低く、季節を問わずその一帯だけに雨が降るといふこともしばしばである。これを敷衍するならば、上代におけるシグレが、局地的な天象を指す語彙から発生したといふことも充分考え得ることである。

しかし、中国大陸において同一の条件を持つ土地を見出すことは困難である。シグレに類する語が中国語にないことも、むしろ当然とすべきかも知れない。中国文学において秋や冬の節物として美しい「雨」が描かれた例は見られないという点に、日中の気候の違いに応じた文学形成の差異がみられるといつてよいであろう。

四季の意識は、中国文化を享受した結果、日本にもたらされたものである。しかし、季節の美景を表現する語彙は、日本独自の発想に基づいて形作られているのである。

五 おわりに

以上みてきたように、万葉集におけるシグレとは、現代言うところの「しぐれ(時雨)」とは異なる意味をも内包していたと考えられる。

「シグレの雨」という例が示すように、シグレとは本来は物が密

集する様子を表す語であったと考えられる。それが、秋の歌で「シグレの雨」として表現されたことから、シグレだけで特定の雨を意味するようになったと考えられる。天平期にはどちらの用法も並存しており、従来から指摘されるように、黄葉を促し山を色付け、それを散らすものとして、季節や美景の描写と強く結びついている。こうした推移のなかで、シグレとは、なにかが密集する様を表す語から、時間的・空間的にある点に集中して降る雨へ、そして秋冬の冷たい雨へと語義を広げていったとみられる。

中国文学には、同様の語彙・表現は見出し難く、このような「雨」は、風系や地形から、中国大陸ではみられない現象であるということができ、それ故に、日本独自の語彙として、形成される必然性があつたものと考ええる。

四季の意識は中国文化を享受した結果ながら、季節の美景を表現する語彙としての上代のシグレは、日本独自の発想に基づいて形作られているといえるであろう。

注

1 内田賢徳「萬葉しぐれ考」『ことばとことのは』第十集、一九九三年一二月、あめつち会

2 『時代別国語大辞典 上代編』一九六七年一二月・三省堂、中田祝夫編『古語大辞典』一九八三年一二月・小学館、『日本国語

大辞典 第二版』第六卷・二〇〇一年六月・小学館など

3 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば枕詞大辞典』一九九九年五月・角川書店、片桐洋一著『枕詞歌ことば辞典 増訂版』一九九九年六月・笠間書院など

4 内田前掲論文

5 旧大系本では前掲の「時雨」の例をシグレと訓じているが、内容的に考えて相応しくない。新大系本ではジウとされている。

6 寺川眞知夫「上代の雨の表記と表現」『上代語と表記』二〇〇〇年一〇月、おうふう

7 村田正博「長田王の歌」『万葉集を学ぶ第一集』一九七七年一二月、有斐閣

8 吉田崇「『万葉集』における季節歌の特性―しぐれを中心に―」『湘南文学』三五号、二〇〇一年三月

9 村田前掲論文

10 「靈或作露」(集韻)

11 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば枕詞大辞典』一九九九年五月・角川書店